

# SEMBAJIN 船場人

## 特集 船場の 職人の



有限会社モリス工芸社 椅子張り職人

### 森下明久さん

#### 令和6年春「黄綬褒章」受章

椅子張りとは、椅子の木枠などにクッション材を入れ、布や革の生地を張って、椅子を完成させる作業のことをいう。

「びんと引っぱって施工するから、張りの字をつかいます」と森下明久さん。生地を、船の帆を張るように外側へ引っぱり内側に巻き込む。もちろん作業はそれだけでは足りない。

たとえば張り替えなら、元の生地をめくるところから始まる。木枠に角やざらつきがあれば、生地が傷む。そこでペーパーをかけてという手間を森下さんは惜しまない。

「ちよつとでも長持ちするように」。それが森下さんの一番大事にしていること。ミシンもひと手間多くかける。もう一つ大事なことは「座り心地」だ。クッションにウレタンフォームを敷く際も、どの硬さがふさわしいか厚さはどうか、いくつかのウレタン材を組み合わせて試す。木枠に取り付けたら今度はハサミで角を取り、形を微調整する。

「当たり前のことをしているだけ」と森下さんはいうが、量販店の椅子にそのひと手間は無い。張り終わったら手間は目に見えない。しかし、そこで手を抜くことはしない。

椅子張りには国家検定があり、該当する職種は「家具製作(いす張り作業)」で森下さんは

一級技能士。これまで数々の表彰や受賞を重ね、2024年「黄綬褒章」を受章した。

#### 椅子張り職人は三代目

社名「モリス工芸社」は、19世紀英国のデザイナー、ウィリアム・モリスにちなんだそうだ。命名したのは森下さんの祖父、武市さん。阿波座で修業し、戦後、現在の博労町へ。二代目は父の恒明さん。だが、森下さんが父親と共に働くことはなかった。大学卒業後、内装の間屋で3年勤め、父親の知り合いの椅子張り職人の元で修業を始めて1年足らず。急に恒明さんは病気で亡くなった。3年ほど修業したら一緒に働くつもりだったが、それは叶わず、会社を継いだ。半人前の森下さんは、組合の同業者や父のライバル的な職人に



この日張り替えた椅子のクッションは、ウレタンフォーム素材を3層組み合わせた。最下部中央はややハード、全体をソフトな素材で包む。四隅は特に生地を強く引っぱって、留める。

も教えを請い、技能を高めていった。

初代の得意先は大手ゼネコン、二代目の得意先は内装業者。多くの同業者が東大阪で大きな工場を持ったが、ミナミや北新地の店舗

が仕事場だから、船場は立地が良い。工場は必要ないと元の場所に残った。現在の仕事は代々受け継いだホテルの椅子のメンテナンスや、椅子張り技術を応用した劇場の扉、チャイルドルームの衝撃吸収・防音の内装、リハビリ器具やスポーツジムのクッションなど幅広い。

森下さんに弟子はいないが、技能士会をつくってノウハウを教えているほか、ワークショップの生徒からは二級技能士も生まれた。外弟子は数多い。



もりしたあきひさ 1963年大阪生まれ。有限会社モリス工芸社 取締役社長。2012年「なにわの名工」、20年「現代の名工」表彰。24年黄綬褒章を受章。15年大阪椅子張技能士会を発足し、会長として椅子張技能士と業界の発展に尽力。厚生労働省ものづくりマイスター、全技連マイスター会大阪府支部会長、職業訓練指導員。

「椅子を買い替えようかなと思ったら、一度張り替えをご検討ください。ご相談に応じます」と森下さん。

モリス工芸社  
博労町3丁目1-15 06-6251-3764  
※現場に出ていることが多いため、来訪の場合は要問い合わせ  
map

